



# Let's TANQ便り

本質を問う学びへ 教室の学びを変えるためのニュースレター

## 今号の内容

オンラインイベント  
「令和の高校における  
授業改革」の様子

日本OECD共同研究月  
間「ホンキで、インク  
ルーシブ」のご案内

東京学芸大学 高校探究プロジェクト × 日本OECD共同研究  
壁のないあそび場-bA-プロジェクト

2023年3月4日(土)  
16:00 - 18:00

オンラインイベント

令和の高校における授業改革

## 「教育改革」が「より良い未来創り」に

3月4日に高校探究プロジェクトと日本OECD共同研究 国際共創プロジェクト「壁のないあそび場-bA-」との共催で、オンラインイベント「令和の高校における授業改革」を開催しました。教科の本質に迫る授業、生徒にとって充実感のある授業へアップデートしたいと思っても、それを実行・実現するには、様々な「壁」があります。これまでの本プロジェクトの参加者からも度々聞いてきた声でもあります。高校教育をめぐるエコシステムの中にいる私たちが、それを越えるには、どうしたらよいかをともに考えるイベントとなりました。

最初のセッションは、今回はパリからオンライン参加していただいたOECD教育スキル局シニア政策アナリストの田熊美保さんの、「何のための教育改革か」を考えることを忘れないようにしたいという提起から始まりました。まず社会のデジタル化により生まれた利点とリスクが紹介されました。情報が圧倒的なスピードで拡散することによる集団の均一化、個人の興味・関心を特定し、個別の情報提供されることによる同質な集団の形成、エンパワされる人がいる一方、自動化により考えることをやめてしまう（自律するパワーを無意識にも失ってしまう）人も出てくることなどです。そのような変動が続く中で、求められるスキルもルーティンな業務をこなすことから、想定外の破壊・分断・混乱等にも対処するものへと変化しています。

2030年の社会がどうあるべきかを考え、それを実現するための学びの指針としてつくられたのが、OECD Education2030のラーニングコンパスです。

また、昨年12月に開催されたOECD教育大臣会合では、Declaration on Building Equitable Societies Through Educationと題する宣言がなされており、子どもたちにとって、より多様性・公正性・包括性をもたらす社会を形成していくこと、特に、もっとも弱い立場や環境にある子どもたちにどう向き合っていくかが課題となっています。

### ラーニングコンパス 2030・Agency

解のないVUCAな社会の中で、自らの道を自らで切り開く

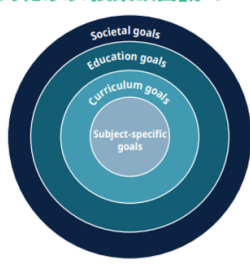
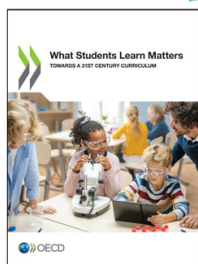
より良い未来を当事者として創る

- 自分の人生、および周りの世界に対して良い方向に影響を与える能力や意思があると信じていることができる（＝自らの在り方（Being）を肯定できる、自己効用を感じられる、自らの存在・周りの物事に意味を見出せる（Meaning-making））
- そういった変化を起こすために（doing/ actioning）、目的を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力



- 働きかけられるというよりも働きかけること
- 型にはめ込まれるというよりも、自ら型をつくること
- 他人の判断や選択を受け入れるのではなく、責任のある判断と選択を自らが行うこと。

なんのための「教育改革」か？  
 なんのための「カリキュラム改定」か？  
 誰のための「授業改善」か？



社会全体のゴール  
 教育のゴール  
 カリキュラムのゴール  
 各教科のゴール  
 →社会全体のゴール  
 =生徒たちの顔

## カリキュラムとは、「どのような環境で生まれた子どもであったとしても、担保される学習の機会とコンテンツにアクセスできるためのライフライン」

このようなことをふまえ、「みなさんの周りには、どんな壁がありますか？」「それらの壁を乗り越えた先にある社会とは？」について対話をしました。10分という短い時間でしたが、将来、どのような社会にしたいか、それを「自分ごと」と捉えて、いま目の前にいる生徒の教育を考える契機になったのではないかと思います。

続けて、田熊さんから、時に「分断」「二項対立」「未結合」の構造で「壁」が繋がってしまいがちではないかという問題意識のもと、越えたい壁として、「1. 学校内のつながりの中で」「2. 学校を越えた『縦・横・斜めの制度のつながり』の中で」「3. 制度を越えた『暮らし・空間のつながり』の中で」に整理して例示されました。

「1. 学校内のつながりの中で」では、「探究」という点からは、教科教育と探究・総合・教科横断・PBLの間の壁、教科と特別活動の間の壁、インプット・アウトプット・アウトカムという直線的な評価と非直線的な学習プロセスの間の壁が着目されます。さらには、「2. 学校を越えた『縦・横・斜めの制度のつながり』の中で」として、**校種を越えた交流・共同・共創**（盲学校・聾学校・養護学校、夜間中学校・定時制高校、工業高校、農業高校、商業高校、高専、専修、専門学校、在日外国人学校・非一条校含む）、**学びの連続性**（保幼小連携、高大接続、小中一貫、中高一貫）、**学びと育ちの場所の連続性**（学校・塾・フリースクール、家庭・児童養護施設・公民館・児童館、サードプレイス、各種NPO）、**学校と学校**（転校、留学）、**学校と病院**（院内学級の子どもたち）、**学校と企業**（カリキュラム共創、コワーキングスペース）、**学校とデイケア**（異世代間の学び）、**学校と家庭**のいずれのつながりが挙げられました。

「探究」はもちろんのこと、教育に対する私たちの視野が狭くなっていることに気づかされたのではないのでしょうか。

続けて、壁を越えるためのヒントとして、「例1：効率性かイノベーション・余白か？」「例2：対立を越える対話の力（新たな視野の発見・他者と協力して見つける解と全容）」「例3：文理融合 フランス高校卒業試験・理系にも問う哲学の問い」「例4：入試もじわじわと変わってきている（高齢化社会におけるお医者さんの資質を問う方向性の例）、解が一つでない問い立て」が示されました。これらの前提として、リスキングの前にアンラーンの重要性を確認しました。

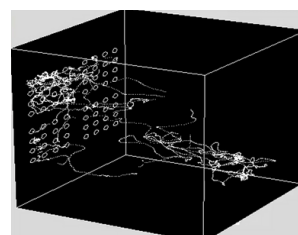
## リスキング

の前に・・・Unlearnアンラーンを！

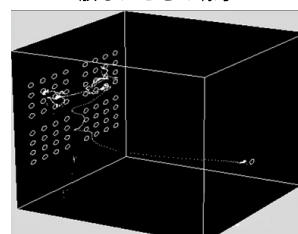
リスキングのための今ある供給（サービスや研修）は、そもそも**未来の需要**にあっているか？

- まずまず問われる、年齢を問わず必要な・・・
- ・ 「(様々な教科&教科を超えた)見方・考え方」
  - ・ 「当たり前を問い直す力」
  - ・ 「常に自らの視点(の狭さ)を疑い、見えない世界・知らない世界を想像する力」
  - ・ など

「例1：効率性かイノベーション・余白か？」では、ミツバチの実験が取り上げられました。右のような箱の左側面の穴にミツがあります。右側面から箱に入れられたミツバチは、最初、箱の中を飛び回り、なかなかミツにたどり着けません。しかし、一度、ミツのありかがわかると、次からはすぐにその穴にたどり着くようになります。



一回目にミツバチを箱に放したときの様子



二回目にミツバチを箱に放したときの様子

これをメタファーとして、日頃の生徒の学びを考えてみましょう。自分で探す（考える）からこそ見えるものがあり、それは最初から行き方を教えられてしまったら見えないもの（考えが及ばないもの）です。効率よくこなすことは人工知能に任せられる社会になるとしたら、どちらが重要かは明らかです。確かに前者のほうがこれまでの入試対策としては有効だったのかもしれませんが、社会全体のゴール（目標）としてそれでよいのかということ考えると、探究的な学びの意義が腹落ちするのではないのでしょうか。

今回の対話を通して、さまざまな教育改革を**二項対立化して考えてしまう**ことが多いことにあらためて気づかされました。本プロジェクトに参加されている先生方から、「同僚に、探究的な学びをしていたら、入試対策ができない、と言われてしまいました」という声をよく聞きます。これも探究的な学びとこれまでの授業の間に壁をつくって考えてしまっているということです。**壁をネットに換える**だけでも、双方が溶け合った新しい色の学びができるのではないのでしょうか。

## 授業研究ワークショップを通して 乗り越えた「壁」これから越えたい「壁」

高校探究プロジェクトでは、各教科で、授業づくりチームを結成し、授業研究に取り組んでいます。今回は、滋賀県化学部会で授業づくりプロジェクトチームを発足した化学部会長、数学科ワークショップのDチームメンバーと対談しました。

滋賀県化学部会長：滋賀県立虎姫高校・堀浩治先生

滋賀県の化学教員の年齢構成をふまえ、若手教員とともに探究的な学びをつくっていききたいと考えていました。その際に感じていた「壁」は、知識や時間、実験器具が足りないといった「**教材開発**」、理科教員や単位数、学びの場が少ない「**組織体制**」、探究的な授業をしたことがない・観たことがない「**授業観**」、生徒の資質能力を育むための「**教科・科目の専門性**」でした。これらの壁を乗り越えるために「授業づくりプロジェクトチーム」を結成しました。そこでのオンラインによる教材等の共有および検討会を通して、最初の3つの「壁」を乗り越えることができました。そして、最後の「壁」は、高校探究プロジェクトと連携することで乗り越えられたと実感しています。

次年度も、この取り組みは続けつつ、新課程で導入される「熱化学」については県を越えて、全国の先生方とも協議したり、授業を参観し合ったりする場をつくっていききたいと考えています。

授業者の先生からも、「最初、探究的な学びの実践に向けては不安があったが、検討会を経て、情報や実験器具・データを共有させていただくことで前向きに取り組むことができた」「今までやりたいと思っていたことをすべて受け入れて、背中を押していただいた」といった声を聞くことができました。

### 数学科授業研究ワークショップDチーム

研究授業の授業者：岐阜県立郡上高等学校・兼森厚太先生

全国の先生方とこういった取り組みをするのは初めてだったので、授業研究する中で、自校の課題を伝えることが難しかったが、情報を共有しながら授業研究を進めることができました。

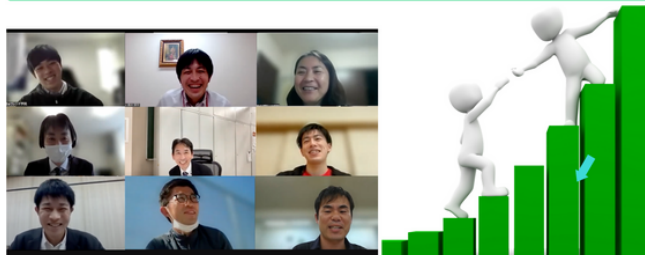
はじめに提案した授業案は漠然としたものでしたが、検討会を通して、ねらいが定まっていき、**ひとつの授業だけではなく単元計画まで考えることができ、壁を越えられた気がしています**。今後は、「先生、早く答えを教えてよ」という生徒への対応には、やはり単元指導計画が必要で、時間はないけれど、そういった生徒とともに考えていく授業をつくっていききたいと考えています。

ファシリテーター：学芸大附属国際中等教育学校・野島淳司先生

最初「壁」だ感じていたことは、学校や県を越えたメンバーと「何のために探究的な学びをするのか」といった目標を共有できるのかという点でしたが、実際、検討会を重ねていくと、内容をどう教えるかではなく、どんな生徒を育てたいかという大きな枠で協議ができるようになってきました。ファシリテーターとしても、楽しく取り組むことができました。このような授業研究の楽しさや意義を理解してくれる人は、高校の先生の中にはまだまだ少ないと感じています。「教育が先行して社会を変えられる」という話もあったように、**やりがいがあるこの授業研究の取り組みをどうすれば多くの人に伝えていけるのか、拡げていけるかを考えていきたいです**。

乗り越えられた「壁」はありますか？

これから越えたい「壁」はなんですか？



チームリーダー：

立命館宇治中学校高等学校・酒井淳平先生

年齢層が幅広いメンバー構成でしたが、若い先生が積極的に研究授業に手を挙げてくれて、検討会もみなさん忙しい中、無理してでも参加してくれて、毎回、エネルギーをもらっていました。越えられた壁として、1つ目は、生徒が違うと思っていたけれど、実際に授業を観に行くと、共に検討した指導案だったので、他校の生徒でも自分の生徒に思えたことです。2つ目は、自分自身が大事にしてきた授業づくりは、過去に自分が学んできたもので、この取り組みを通して、過去の自分を少し越えられたかなと感じています。今後、みなさんとともに、**授業づくり、授業研究に重きを置かれる学校やチームを創っていききたい**と思っています。

## イベントを振り返って

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構  
機構長特別補佐 特命教授  
高校探究プロジェクト特別顧問 長尾篤志先生

新型コロナウイルスが拡大して、苦しいことなどたくさんあったが、唯一よかったことは、今日のように、パリと結んで、日本全国の先生方と話ができるようになったことではないか。

今回は、ずっと「壁」についての話だったが、一番大きな「壁」は、自分が勝手に創り上げた「壁」ではないか。こういった場に参加して、自由に自分の想いを交換することはとても大切だと感じた。こういう機会をもてない人は、本当に強固な「壁」になってしまっているのではないだろうか。

「授業研究ワークショップ」に参加し授業をしたり見たりした、ほとんどの先生がおっしゃられるのは、自分は生徒を見ているつもりだったが、実は、ほぼ見れていなかったこと、生徒の目線で発想することがなかったということ。これは大きな気づきで、それ以降は、徐々に、生徒の学びがどうなのかという視点で授業をつくれるようになってくると感じている。

困難なこともたくさんあると思うが、少なくとも、200人近くの人が、ここに集まって、これからどうしようかと考えたわけで、このことの価値をみしめて、一歩ずつ拡げていききたいと考えている。

## 参加者の声

## ～ぜひ、高校生の声をご覧ください～

田熊さんの話題提供「教育改革の壁を越える」およびオンライン対話「壁」と「壁の越え方」について

- ・教師と生徒の間の壁があるとは感じていたけれど、教師同士の間にも壁があることを初めて知りました。親近感が湧き、先生に話しかけやすくなりました。(高校生)
- ・教育現場の課題を見直しつつ、今後どうしていくのか踏み込んで考える機会となりました。課題を見ると教育の悪い面が浮き彫りになることもありますが、良い面も見ること、改善点と伸ばすべきところを冷静に、メリハリをつけて考えていくことが重要だと感じました。(高校生)
- ・「フランスでは、評価ができないからといって問わないという選択をすることははない」というお話が印象的でした。日本に置き換えてみると・・・(高校教員)
- ・教育をエコシステムとしてとらえ、どのように有機的につながっていくのかというお話に、つい目先のことに注意が向かいがちな自分を反省し、改めて、**自分の取り組み・あり方を俯瞰的に見て問い直す機会**となりました。(高校教員)
- ・自分自身に閉じていた視点を広げることができました。次年度に向けてのワクワクをいただきました。やれることがまだまだたくさんあると感じました。(高校教員)
- ・マクロな視点で知見を得て、それを目の前の生徒に還元することが、探究でも日々の授業づくりでも大切であると実感しました。私も、県を越えて先生方と繋がりたいと思いました。(高校教員)
- ・まさに今回のような**新たなコミュニティの場で人間関係を広げること、自分の考え方をアップデート**することで、壁は乗り越えることもできるのではないかと思います。(小・中学校教員)

プロジェクトの取り組み、および授業研究ワークショップ参加者との対談について

- ・私自身は生徒という立場のため生徒目線で考える機会が多いのですが、先生の立場になって考えてみることの重要性を感じました。**それぞれの立場の目線も大事だからこそ、互いの意見や価値観が異なるからこそ、対話がより面白くなっていくのだと思います。**(高校生)
- ・このような機会が初めてで緊張しましたが、**自分の学校外の先生や教育に携わる方と対話をして考えが深まった。**今後も自分から積極的に行動していきたい。(高校生)
- ・壁を乗り越えるために必要なことはやはり対話。壁を全て壊すことはできない。壁も含めて、相手を理解すること。そもそも壁は自分で作っていることが多い。どのような未来を描くか、何を目指すか、同じゴールに向かって一緒に進む仲間を作る努力をしていきます。今日の対話を通して、元気と勇気をもらいました。(高校教員)
- ・**同じ教科という同質での深まりと異なる地域という異質な広がり**が組み合わさることで、大変興味深い活動だと思いました。(高校教員)
- ・異なる学校の教員で授業研究を進める中、**どのような生徒像を目指すかという点で一致できたというご意見に、そこが我々の目指すべきゴールだと改めて気づきました。**(高校教員)
- ・このプロジェクトに参加して1年くらいになります。自分の生活範囲が広がり、**仕事に対するモチベーションが高まっていることは事実です。**(高校教員)
- ・セクター別(企業・教育委員会・学校・教師・保護者・生徒)の間に様々な壁があり、どのようにその壁を乗り越えていけるのかを気づきをいただきました。(会社員)

## 日本OECD共同研究月間「ホンキでインクルーシブ」を開催中

東京学芸大学が事務局を務める、日本OECD共同研究国際共創プロジェクト・壁のないあそび場-bA-では、複数のワークショップをマラソンのように開催する「日本OECD共同研究月間」(期間：3/3-3/31)を開催しております。  
\*ワークショップの開催日時をクリックすると参加申込ができます。

### ◆ 3月10日(金) 17:30-19:30

OECD e2030グローバルフォーラム「福島とウクライナの生徒の声を聴こう:放射能と戦争の中で共に生きる」

### ◆ 3月12日(日) 第一部 13:00-15:00, 第二部 18:00-20:00

「先生って魅力的なオンゴト！」

将来教師になりたい学生・院生が企画。先生になることにワクワクを感じるワークショップを目指して、理想の教室をゼロから作ってみよう！という内容で、将来教師になりたい大学生・高校生・社会人、実際に学校で働いている教員、教員を退職した人などが集い、対話するセッションです。

### ◆ 3月25日(土) 19:00-20:30

「同じ地面に立つ私たち、虹色の個性」

立川学園(ろう学校)の生徒たちが、自分たちの<個性>を通して見える「日常の景色」を共有します。手話で詩の朗読も披露します。

### ◆ 3月31日(金) 17:00-19:00

OECD e2030ラーニングコンパス部会

「プロジェクト無限大生徒と教師の国際共創」

その他のワークショップの詳細や参加申込は、下のURLまたは右のQRコードから！  
<https://gakugei-asobiba.org/archives/998>

